
夜の二重らせん

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の二重らせん

【コード】

N9508I

【作者名】

一二三四

【あらすじ】

人生は有限の旅ではない、と誰かが言う。

油物は嫌いよ、と彼女は言う。でもあなたが肉を油で揚げている時の音と姿は好き、とも彼女は言った。

ボロアパートに一日の大半を沈める僕のもとに今日も彼女はやってきた。一秒ずつ間を開けたノックが三回。もとより鍵は掛けているけれど、僕は儀礼的にドアを開ける。木造建築のアパートは三階建ての上に先の大戦から建っていて、しかしその廊下に立つ彼女も先の大戦から生きる種族の一人でもあった。

こんにちは、と僕が話しかけても彼女は答えない。声帯が退化してしまつて 最初からないのかもしれない 言葉を音として発することができないのだ。その代わり直立する体から無数に生える思念糸を動かし共通言語を使つて意志を伝える。この世界において満足に言葉を発することのできる種族などいくついるのだろうか。正確な数は分からずとも、かなり少ないはずだ。

どうぞ、と中に呼び寄せると彼女はちゃぶ台の前に座つた というより横たわつた。遠目から見ると白い思念糸で覆われている彼女だけれど、残念ながら僕の一部屋は広くない。その上明かりと言うものは裸電球がぶら下がっているだけだから、思念糸の下でうごめく動物の腸みたいな肌が見える。それがまたグロテスクには見えず扇情的に見えるのは、彼女が発するフェロモンのせいだけではないと思つた。

今日はお別れを言いに来たの、と音も立てず思念糸は伝える。彼女は僕の語学力に合わせて言葉を選んでくれているので、かなり異訳している。本当なら、「今日／別れ／言う」ぐらいの物だ。

どうして、と僕は二本の腕で共通言語を操る。声に出してもいいけれど、それだと逆に彼女の理解力が追いつかない。僕の共通言語を操る能力と彼女が僕の言葉を理解する力を見比べたとき、辛うじて僕の語学力に軍配が上がるのだ。

大陸の方に異動することになったの、いわゆる引き抜きつて奴ね。半分は嬉しそうに、もう半分は別れを悼んでくれているせいかな、思念系の動きは明るさと翳りを微妙に含んでいる。

大陸の方ってというと、戦後補償の特使で？ 僕は彼女の仕事をよく知らないけれど、話の口ぶりから外交問題を扱う職業だと察していた。特に口の端に上ることが多いのが戦後補償の問題で、そういう物は些事だと思う僕に彼女は優しく教えてくれるのだった。そういえば彼女との出会いもアパートへのアプローチにある通りでデモがあつたからだ。

そういった問題も含んでということになると思うわ、少なくともそれだけではないのよ。思念系が揺らぐ。裸電球の光が一瞬だけ消えたように感じた。

危険な仕事ってこと？ と僕は聞く。ちゃぶ台を挟んで彼女の対面の場所からはカーテンの無い窓が見えて、その向こうは夜の帳に隠れた高層建築物が。都会のエアポケット、という使い古されたフレーズは、しかしぴったりとこのアパートを形容するのだった。

危険がないといえば嘘になるけどそんなに危険じゃないわ。彼女は微笑んだ。もちろん腸みたいな肌がうごめき、分泌されたフェロモンが嗅覚を通してそう思わせたただけなのだけれど、そういった他者との差は補償問題と同じで僕には些事だ。

久しぶりに豚肉でも焼いてよ、と彼女は言う。冷蔵庫の奥に封を切っていないのが一つ残っているわ、と。

立ち上がりちゃぶ台の奥、部屋の最奥、流しの牙城の側にある冷蔵庫を開けると、確かに豚肉が残っていた。消費期限が刻印されていたみたいだけど、印字が滲んで読めない。どれだけ昔の物なんだと苦笑しながら持つて戻ると彼女は、あなたが三度目の産み直しに入る前に買ったものよ、と何気なく言う。僕はちよつと考えてから眉間に手をやった。消費期限の超過という次元を超越している。

揚げてくれるだけでいいの、お願い、明日には発ってしまうから。彼女が切実に伝えるから僕はつい異次元の豚肉を夜に解き放つてし

まう。台所の棚からは小麦粉とパン粉、冷蔵庫からは卵を取り出してそれぞれ下準備する。油を入れたフライパンを火にかけ、いい具合に温まるのを待つ。最近のコンロは自動的に揚げ加減を見てくれる物もあるらしいけど、そんな設備はもちろんない。

そういえばあなたはエプロンをしないのね。油が温まってきた跳ねだした。

君ってどこから見ているの？ 真っ白な衣を身に纏った豚肉をフライパンの中へ入れる。

どこって……そうね、あなたが知らない所。低いくぐもった音と共に、余分についた衣が豚肉を離れる。

君はどこを見ているの？ 大量の泡がフライパンの底から湧き出して豚肉を覆い隠す。

そういう無意味な話って嫌いよ。豚肉はぶつぶつと呟き、きつね色になっていく。

ひっくり返し、隅々まで。きつね色が変わっていく豚肉は、最終的にトンカツになった。大きめの皿を出して、食べはしないけれど気持ちだけは食事風に整える。

ねえ、と彼女は言う。今日は最後だから、しない？ 思念系はとも卑猥な形に動く。彼女がスラングを使った所を見たことがなくて、僕はあっけに取られた。その一瞬だけで彼女は十分だった。

肉塊が質量を感じさせない滑らかな動きで足に取り付くと、膝を折るようにして僕は床に倒れた。引き摺られるまま木の床を鳴らし、ちゃぶ台の前へ引つ張られる。

ねえ、ともう一度彼女は言う。今日が最後だから、お願い。それは思念系に現れない感情の波で。はっきりと僕の鼓膜を打った。

絞られるように右腕が彼女に飲まれ、彼女と僕は光学転写で交わる。人が感じられる快感は彼女のフェロモンによって与えられ、彼女は異種間の交配による進化の道しるべに絶頂を感じる。彼女が痙攣するたび肉壁が、指で顔で胸で、擦れる。

ごめんね、ごめんね。肉壁が体から離れる。ごめんね、ごめんね。

落ちて着いたら連絡する、と紋切り型の言葉で結びドアは閉まった。
部屋にはまだ彼女の匂いが残っている。

(後書き)

感想等お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9508i/>

夜の二重らせん

2010年10月8日15時13分発行